大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

詩の「無我の境」：陶淵明の「飲酒五」と元好問の「潁亭留別」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 冰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016785

詩の「無我の境」
—陶淵明の「飲酒五」と元好問の「穎亭留別」

楊　　冰

はじめに

中国近代の学者王国維（1877～1927）は、1908年に執筆した『人間詞話』[1]という詩論に境界という詩の概念を打ち出し、さらにそれを「有我の境」と「無我の境」に分け[2]、「無我の境」について次のように説明している。

> 「菊を采る東籬の下、悠然と南山を見る。」、「寒波澹澹と起る、白鳥悠悠と下る。」は無我の境なり。無我の境は、物を以て物を觀る、故に何者の我爲り、何者の物爲るやを知らず。[3]

説明の前半は、時代の異なる二人の詩人それぞれの詩作の一部を例としてあげている。「菊を采る東籬の下、悠然と南山を見る。」というは、魏晋南北朝の陶淵明の「飲酒五」による二句で、「寒波澹澹と起る、白鳥悠悠と下る」というのは金末期の元好問の「穎亭留別」による二句である。「飲酒五」と「穎亭留別」のそれぞれの全篇は前者が50文字で構成され、後者が80文字で構成されていずれも五言古詩である。原文は以下の通りである[4]。

> 飲酒五
>
> 結盧在人境、而無車馬喧。問君安能爾、心遠地自偏。採菊東籬下、悠然見南山。山氣日夕佳、飛鳥相與還。此中有真意、欲辯已忘言。
>
> 穎亭留別
>
> 故人重分携、臨流駐歸駕。乾坤展清眺、萬景若相借。北風三日雪、太素秉元化。九山鬱崢嶸、了不受陵跨。寒波淡淡[5]起、白鳥悠悠下。懐歸人自急、物態本閑暇。壺觴負吟嘯、塵土足悲咤。迴首亭中人、平林澹如畫。

王国維の選んだ部分はいずれも筆者が下線を施した詩の真ん中の部分である。「無我の境」に触れる先行研究[6]は、下線のある箇所、いわゆる王国維が挙げた部分だけの解釈に止まって「無我の境」を論じてきた。例えば、葉嘉瑩は「無我の境」に対して「我と外物は対立せず、外界の景物は我と利害関係を持たない時の境界」と分析している[7]。しかし、詩人と外界の景物との利害関係を考えると、ほとんどの場合において利害関係は存在しないのではないだろうか。「飲酒五」の山が崩れ、「穎亭留別」の鳥が襲って来ない限り、本来詩人と利害関係などが生じないはずなのである。従って、利害関係が存在しない詩人と外物の関係は多く存在するが、全て「無我の境」になりうるのだろうか。「無我の境」の例として、王国維は確かに詩の全体ではなく、一部のみ挙げているが、彼の意味することはこの一部だけで「無我の境」を成しているということではなかろう。そもそも詩の一部を全体から離れて単独で解釈することはありえない。詩の一部を挙げれば、読者は詩の全体を思い浮かぶと想定されたのであろう。従って、「無我の境」を理解するには、例として挙げられた詩の一部だけを解釈することは不十分である。本論文は、二首の詩の全篇の内容を視野に入れて王国維の挙げた一部を解釈する。特に、王国維はなぜ詩の他の部分ではなく、その二句だけを例にしたのか。つまり、その二句を選んだ理由とは何かを検討し、それによって王国維の言う「無我の境」とは何かを明らかにする。

一、陶淵明の「飲酒五」

「飲酒五」は陶淵明の「飲酒」二十首のうち最も知られている一篇である。「飲酒」二十首は全て五言古詩で、陶淵明が最後の官職（彭沢県の県令）を辞めた後、故郷（江州の尋陽郡・現江西省）[8]に戻り畑を耕して生計を立てていた時期に創作されたとされている[9]。「飲酒」二十首の最初に書かれた「序」によると、陶淵明は良い酒を飲んで酔った後、自らを楽しませるために書いたという創作された背景が分かる[10]。つまり、「飲酒」は陶淵明の実体験に基づく作品である。

1　第三者の視点

最初の二句は「結廬在人境、而無車馬喧。（廬（いほり）を結んで人境（ひとのよ）に在り、而（しか）も車馬の喧（かまびす）しき無し。）」である。（私は）人が賑わう里に家を作ったが、車馬のやかましさを感じていないと述べている[11]。そして、次の二句は「問君何能爾、心遠地自偏。（君に問ふ何して能く爾るかと、心遠ざかり地自ら偏ればなり。）」である。この部分は、主に詩人の自

問自答とされてきた[12]。何故それができるかというと、心が遠ければ、住む地も自ずから辺鄙になるからだという理解である。だが、自問自答というと、自分が自分に聞くと独り言のように感じるが、果たしてここは単に陶淵明の独り言なのだろうか。ここは、陶淵明に問いかけているある第三者の視点が現れていると指摘したい[13]。

陶淵明は自分の心が環境に影響されないと語っている。では、当時陶淵明を取り囲んでいた環境はいかなるものだったのだろうか。陶淵明の生きていた魏晋南北朝の時代は、長い中国の歴史においても有数の混乱期の一つとしてあげられる。彼の存命中の六十三年の間に、軍閥たちが相次いで中央政権（王朝）を狙い、中央政権が三回も交替し、社会全体に不安定な状況が続いていた[14]。そして、彼の生活環境を見てみると、生前から文人たちの間で隠者と評され、尊敬されていたが、彼の実生活は「常に辛苦と飢寒に耐えていた」[15]と過酷な暮らしぶりであった。これほど過酷な環境に生きていた陶淵明は、なぜ環境に左右されない心を得られたのだろうか。

飲酒と同じ時期に作られた「帰去来兮辞」は、陶淵明の役職を辞めた後の心情が描かれている。彼は「心を以て形の役を為す（以心為形役）」ということができないため、官を辞めたと述べている。同じ作品で「形」は「口や腹」（皆口腹自役）に言い換えることもあるため、「形」とは生身の身体を意味しているとわかる。「心を以て形の役を為す」というのは、身体の生理的な欲求、飲食の需要を満足させるために、心の望まないことをすると理解できる。それができなかったから、陶淵明は役職を辞めた。陶淵明は体の感じ方より心の感じ方をより大事にしている。それは当時の盛んな思想、玄学の思想と関係している。

陶淵明の生きていた時代は、老子と荘子の思想から展開した「玄学」の思想が文人の間で流行していた。玄学の誕生と時代との関係について、ある研究者は次のように述べている。「漢末以降政治が混乱し、国家は頽廃していたが、思想の分野は非常に自由であり、解放されていた。人々は苦しい現実の世界から自らを救おうとして思想の自由と解放を求めていた。だから混乱・頽廃と自由・解放の間には因果関係がある」[16]という。さらに、「その思想の中心は社会ではなく個人にあり、環境ではなく（人間の）内面にあり、形質ではなく精神にある」[17]という。外側の環境より自らの内面、体より心の感じ方を重視するという点において、陶淵明の思想は玄学思想に通じる[18]。詩の最初に現れた第三者の視点は、陶淵明の玄学思想の現れだと考えられる。

2　主体としての自然

再び「飲酒五」に戻る。いよいよ詩の中盤に入り、王国維の選んだ二句となる。「采

菊東籬下、悠然見南山。（菊を采る東籬の下，悠然として南山を見る。）」ここについての一般的な解釈は、菊を摘み取って頭を上げた詩人の目に、悠然と南山が映る。ここで注目したいのは「見（見る）」という動詞である。かつて「見」ではなく「望」という説もあった。「飲酒五」が最初に収録された梁の時代の『文選』及び唐代の『芸文類集』では「見」ではなく、「望」という動詞で記録されている。「見」が定着した理由は、宋代の詩人蘇軾と関係する。陶淵明の詩が最も評価された宋代では、蘇軾は、菊を採って山を見たという表現は最も妙であって、「望」の説に従えば、詩の神気が全部失われてしまうと、「見」の妥当性を主張している[19]。それ以来、「見」の説が定着となり、やがて王国維も「見」の説を取っている。

見と比べて、望は、意図的に見るというニュアンスが強い[20]。蘇軾は、陶淵明が「菊を採るために山を見る（因採菊而見山）」、つまり菊を採ってふっと頭を上げた瞬間に南山が彼の目に飛び込んだと理解して見の妥当性を主張した。だが、最近の古文字学の研究で解明された見の意味によってもう一つの解釈が可能になった。最近の古文字研究によれば、陶淵明の時代では、「現」という漢字がなかったため、「見」は「現」としてすなわち「現われる」という意味で使われていた。陶淵明の「飲酒五」の「見る」も「現れる」という意味で用いられた可能性が十分考えられるという[21]。「悠然見南山」は、陶淵明は悠然と南山を「見る」という意味ではなく、陶淵明の視野に南山が悠然と「現われる」と理解すべきである。従って、「采菊東籬下、悠然見南山」は陶淵明が東の籬で菊を採ると、南山が悠然と現れると解釈できる。南山は陶淵明に見られる対象という客体ではなく、自ら現れたという詩の主体である。詩の視点は陶淵明と南山を同時に見つめているという第三者の視点に貫いている。だが、悠然とは「ゆったりとして、のどかな様」[22]という意味で、南山がゆったりとして現れる、あるいはのどかに現れるという解釈は、しっくりしない。では、南山が悠然と現れるというのは一体どういう意味であろうか。

3　悠然たる鳥、悠然たる心

「採菊東籬下、悠然見南山。」の後は、「山気日夕佳、飛鳥相與還。（山気日夕に佳く，飛鳥相與と還る。）」が続く。この四句の意味は、陶淵明は菊を採っていると、南山が悠然と現れ、夕方の素晴らしい光景の中、鳥たちが連れ立って（山の巣に）帰っていくと理解できる。南山の風景に対する具体的な描写は、夕方の山を背景に鳥たちが連れ立って帰る場面であるため、南山が悠然と現れた理由は、鳥たちの動的な姿が悠然としていたと考えられる。「悠然」は南山が現れる様子と言うより、具体的に南山を背景に鳥た

ちの飛んでいる姿の様子である。さらに言うと、南山の描写は鳥たちの描写の仲介役であって、悠然という修飾語は鳥たちの姿に掛かっている。

詩の最後に「此中有真意、欲辨已忘言。（此の中に真意が有り、辨と欲して已に言を忘る。）」。ここには真意があるが、辨じようとして言葉を忘れてしまう。荘子は「言は意にある所以なり、意を得ては言を忘れる。（言者所以在意，得意而忘言。）」と述べたことがある。ここで荘子は言（言葉）と意（真理）の関係を論じている。言と意の関係は玄学の重要なテーマである。湯用彤によれば、玄学における言と意の関係は、言葉は真理を表す道具として、真理を得れば、言葉の必要性も失ってしまうという[23]。前文で分析したように陶淵明は玄学の影響を受けている。従って、陶淵明の「已忘言」というのは、「すでに言葉を忘却した」という意味ではなく、「すでに言葉の必要性がなくなった」と理解すべきである。真理を得たから、言葉の必要性がなくなったのであろう。つまり、詩のここまでの部分において既に何らかの形で真理が表現されたことを陶淵明が「已忘言」を以って意味していると考える。

では、真理はどのように表現されたのだろうか。それはまさに「此の中に真意が有り」の「此の中」に表現されている。一般的に「此の中」は連れ立って帰る鳥たちの姿だと理解している[24]。だが、今までの第三者の視点による分析で分かったように、「此の中」を見つめている視線は第三者の視線であるため、「此の中」はある夕方の南山の麓に陶淵明が庭で菊を採り、鳥たちが連れ添って巣に帰っていくという同時に進行する二つのことを指しているのである。良い酒に酔い庭に出て菊を採る人も、巣に帰っていく鳥も「ゆったりとしていて、のどかな有り様」（悠然）[25]である。詩人を含め、詩人の生きている世界のあらゆるものの悠然とした様子こそが「真意」である。

詩の冒頭から陶淵明は「心遠地自偏」と述べていた。果たして、遠という字は、陶淵明の心が人里から遠く離れているという意味だろうか。悠という字は悠遠という単語があるように遠いという意味もある[26]。「心が遠い」というのは、心の悠遠さ、つまり空間的な広大さと解釈する方が、詩の全体を貫く広大な第三者の視点に相応しい。心は詩人陶淵明という一人の人間の精神的な所有物で、広大無辺で普遍的なものでもある。第三者の視点は、陶淵明の個人でありながら普遍的でもあるという心の視点である。詩人の生きている世界のあらゆるものの悠然とした有様は詩人の心の悠然としたあり方でもある。この第三者の視点（詩人の心の視点）こそは、王国維の「無我の境」の特徴であると考える。この点について元好問の「穎亭留別」の分析によってさらに検討しよう。

二、元好問の「潁亭留別」

陶淵明は後代の多くの文人達、唐の李白や杜甫、宋の蘇軾、朱熹などに尊敬され、南宋と並存していた王朝金の元好問もその中の一人であった。「無我の境」の二つ目の例は、元好問の「潁亭留別」[27]である。元好問は、詩を通じて陶淵明の詩作を次のように書いている。「一語天然萬古新，豪華落盡見真淳。（一語　天然　萬古新たなり、豪華落盡して真淳を見る。）」（『論詩三十首第四首』）どの一語をとってもすべて自然で永遠に新鮮さを失わぬ、粉飾がすっかり落ちて、真と淳を見るという[28]。その評価は陶淵明の詩の持つ「複雑を単純に変化させる独特な境界」をよく捉えていると研究者に論じられている[29]。また、彼は陶淵明の詩作を模倣していると、研究者たちに指摘されている[30]。つまり、元好問はたんに陶淵明の詩を高く評価しただけではなく、陶淵明の詩の風格を受け継いだ詩人である。これからの分析は「潁亭留別」における陶淵明による影響に着目したい。

1　詩人の実体験

元好問の「潁亭留別」は、陶淵明と同じく、彼が官職を辞めた後に書かれたものである。官職を辞めた元好問は故郷に戻る途中に友人たちに会い、潁水（河南省）という川の上流にある潁亭で別れを告げて故郷に赴く[31]。詩の副題に、友人と餞別の詩を作ったという背景が説明されている[32]。この詩も陶淵明の「飲酒五」と同じく、詩人の実体験に基づくものである。詩の最初の二句「故人重分攜、臨流駐帰駕。(故人分攜を重んじ、流れに臨みて歸駕を駐む。)」である。友人たちは別れを惜しんでいるため、（私は）馬車を水辺に駐める。その時、詩人は潁水の周辺に広がる天地を眺める。その後は「乾坤展清眺，萬景若相借。（乾坤清眺を展べ、萬景相い借るが若し。）」と続く。天地の間で遠くを眺める（清眺）と、万物は人と繋がりを持っているよう（若相借）[33]だという。元好問は自分を取り囲む自然を眺望すると、自分が万物と繋がっているように感じている。そして「北風三日雪、太素秉元化。（北風三日の雪、太素元化を秉る。）」である。北風と三日も続いた雪の中、宇宙の原理[34]（太素）は万物の形成と発展（元化）を司っている。陶淵明にも宇宙の原理を詠う詩作がある。「神釈」において「萬理は自から森として著わる」と、万物それぞれに与えられた法則、原則に従い様々な形をとって厳然とはっきりあらわれるという意味である[35]。元好問も陶淵明と同じく自然（万物）を単なる風景ではなく、宇宙の原理によって常に形成と発展を遂げている動的な世界として捉えている。

その後、「九山鬱崢嶸、了不受陵跨。（九山鬱として崢嶸たり、瞭（まったく）く陵跨を受けず。）」。草木の茂っている青々としている九つの山[36]は高峻で、全く侵略されないという。元好問の想像であろう。彼は何故このような想像をするのだろうか。元好問の年表によると、「潁亭留別」が作られた1225年の14年前のから、元好問の祖国の金は、ジンギスカンが率いる元に侵略された。そして、11年前の1214年、元好問の兄元好古が元軍に殺害され、それからの５年間、元好問は母親を連れて元軍から逃げ続けていたということが分かる[37]。彼は山々が何者にも屈服せぬ気高さを持っていると想像している。その想像から、侵略軍に屈辱的な経験をさせられている元好問の悲憤が滲み出ている。

ここまでは詩の前半である。前半において、雪が降り続けている天地の間に、詩人は宇宙の原理を感じて万物とのつ繋がりを感じながらも、現実に置かれている境遇を忘れず、山々を自分自身の精神世界のように感じて憤りの感情が詩に現れている。ここの山々は、「飲酒五」の南山と異なり、詩人の目に映る客体である。

２　陶淵明の影響

詩の後半は王国維の選んだ二句から始まる。「寒波淡淡起、白鳥悠悠下。（寒波澹澹として起り、白鳥悠悠として下る。）」「淡淡」は水が揺れ動くさまで[38]、「悠悠」は鳥たちの閑暇なさまである[39]。注目したいのは、「飲酒五」において陶淵明は「悠然」を用いたが、元好問は「悠悠」を用いている。さらに「寒波澹澹起、白鳥悠悠下」は、「飲酒五」の「山気日夕佳、飛鳥相與還。」の構成にも共通点が見られる。それぞれ淡々と流れる川と夕方の素晴らしい山という穏やかな自然環境を描いた後、鳥たちの悠々自適としている姿が描かれている。先ほど登場する山々は全く侵略されないと描写されたが、今の白い鳥たちは閑暇な姿である。山と鳥が対比的な姿として描写されている。山々は明らかに詩人の目に映っている客体であるが、ここで描かれている悠々と降りてくる白い鳥達も客体だろうか。

その後、「懐帰人自急、物態本閑暇。（歸るを懐う人は自ら急にして、物態本（も）と閑暇たり。）」が続く。懐帰人は家に帰りたいと思う人達で、作者自身とも理解されている[40]。物態は「事物の本来の意味」[41]とされているが、その解釈は曖昧である。「物態本閑暇」と「閑暇」が用いられている。先ほどの白い鳥たちの描写に用いられた「悠悠」は閑暇なさまという意味を持っている。「閑」は「のどか、おっとり」[42]という意味を持ち、「悠」と合わせて「悠々閑々」、「悠々閑適」などの言葉があり「悠」に近い意味を持っている。ここの「閑暇」はすでに描写された悠々と下る白い鳥たちのことだと理解できる。従って、「懐帰人自急、物態本閑暇」は作者自身も含め家に帰ろうとする人達は急ぐ様子だ

が、鳥は本来の驚くことなく落ち着いている姿[43]だと解釈できる。ここで「人」と「物（鳥）」を対比的に見つめる第三者の視点が現れる。従って、悠々とする白い鳥達は、詩人と並ぶ詩の主体である。詩の前半は詩人の視点で自然を見つめるが、後半に入ってから、悠々と下る白い鳥たちの描写によって第三者の視点に転じて、第三者の視点で人と自然の世界を対比的に見つめているのである。

その後、「壺觴負吟嘯、塵土足悲咤。（壺觴飲嘯に負き、塵土悲咤に足る。）」とある。壺觴と吟嘯は、陶淵明の詩でもよく用いられている。「壺觴」というのは酒を飲む杯のことで、陶淵明の詩には「引壺觴以自酌（壺觴を引いて以て自ら酌み）」（「帰去来兮辞」）、「一觴雖独進、杯尽壺自傾。（一觴独り進むと雖も、杯尽き壺も自ずから傾く）」（「飲酒七」）にも「壺觴」が用いられている。また、吟嘯とは、詩を吟じたり口笛を吹いたりすることを指すもので、陶淵明の詩には「嘯傲東軒下、聊復得此生。（嘯傲す東軒の下、聊か復た此の生を得たり）」（飲酒七）、「登東皐以舒嘯（東の皐に登りて以て、舒ろに嘯き）」（帰去来兮辞）のように「嘯」が登場している。「壺觴負吟嘯」の直接な理解は、（餞別の酒が入っている）杯壺は吟嘯（の気持ち）を背くという意味だが、壺觴と吟嘯によって陶淵明の世界が象徴されていると理解しても良い。一方、「塵土足悲咤」は「塵土」が道路に舞い上がる塵で、俗世の慌ただしい生活を象徴している[44]。世俗の世界はまことに悲しいものだと述べている。この部分は、陶淵明のような隠者と自分のような俗世に生きる人を同時に見つめるも第三者の視点によるものである。

3　俯瞰的な視点

詩の最後を迎える。「回首亭中人、平林澹如畫。（首を亭中の人に回（めぐ）らせば、平林淡として畫の如し。）」回首（振り返る）の主語は詩人自身で、亭中人は亭にいる詩人の友人たちだと理解できる[45]。つまり、「回首亭中人」は旅に出た詩人が暫く進んだ後、まだ潁亭で自分を見送っている友人たちを振り返る。だが、別れを惜しむ詩人が見送る友人たちをもう一回振り返ると解釈する場合は、詩人の目に映っているものは、同じく別れを惜しみ潁亭に止まって遠ざかる詩人を見送り続ける友人たちの姿のはずである。しかし、その後の「平林澹如畫」は、水墨画のようにあっさりとしている平原の林が描写されている[46]。詩の最後には、詩人の友人たちの姿がなく林の風景が広がっている。前文で分析したように、詩の中盤に入って、詩人自身の視点から第三者の視点に転じられた。回首というのは、詩人の視点からではなく、第三者の視点でそれまでの自分自身を振り返ったのではないか。そして、「亭中の人」とは、詩人を見送る友人たちではなく、さっきまでそこに居た詩人自身のことであろう。距離を置いて自分を眺める視点は、詩人を

超えた第三者の視点である。この第三者の視野には、人間も自然も一体化した淡々としている世界が広がっている。元好問は淡々としている平原の林で詩の幕を閉じる。「ここには真意があるが、辨じようとして言葉を忘れてしまう。」という陶淵明の「飲酒五」の最後の二句は、元好問の「穎亭留別」の詩に漂う余韻のようである。

詩の前半において、元好問は山々に目が触れた時、自分の悲憤を感じたが、後半に入ると、第三者の視点に転換し、悠々としている鳥たちや陶淵明の世界と自分自身を対比的に見つめる。詩の最後で、視点が俯瞰的なものとなり、詩人の個人とその憤りも消えて、執着せぬあっさりとした[47]林の風景で詩の幕を閉じる。

終わりに

前文で触れたように、王国維は「無我の境」について「物を以て物を觀る、故に何者の我爲り，何者の物爲るやを知らず」と述べている。「物を以て物を觀る」というのは、「飲酒五」と「穎亭留別」に現れている第三者の視点、いわゆる詩人の個人を超越した普遍的な視点を通じて、自分の生きている世界を感じ、詩に表現することである。「何者の我爲り，何者の物爲るやを知らず」というのは、詩における、主体と客体の区別が消えた、詩人と自然が渾然一体となっている世界を指している。

「菊を采る東籬の下、悠然と南山を見る。」、「寒波澹澹と起る、白鳥悠悠と下る。」。王国維が挙げたこの二つの例ともそれぞれの詩における第三者の視点がはっきり現れた部分である。またこの二つの例とも、「悠」という字が用いられている。それは偶然ではなく、陶淵明と元好問が感じた世界の共通点を表している。「飲酒五」は陶淵明が感じ取った、自分も含めあらゆるものの「悠然たる有様」を「真意」として表現した。「穎亭留別」は元好問が自分と対比的に鳥や陶淵明のような隠者の「悠閑さ」を表現し、詩の最後で淡々と存在している林を「真意」の余韻として漂わせる。彼らの感じた世界はゆったりとしていてのどかなものである[48]。悠という字は、人間や動物の風貌のゆったりとした様、のどかなさまの意味もあれば、「修潔した心の安らぎ、つつましい状態」[49]という人間の心の状態の意味も持っている。悠は、詩の世界の特質だけではなく、第三者の視点の特質、つまり詩人の心の特質を表すものである。悠は詩の「無我の境」の特質で、「無我の境」の詩人の心の特質でもある。

[注]

1　『人間詞話』は全64則によって構成された詞論である。最初は1908年10月から1909

年１月までに出版された雑誌『国粋学報』の47号、49号、50号において発表された。その後の1926年に樸社によって単行本として出版された。

2　『人間詞話』は、中国古代の詩話によく用いられている、64則の「箇条書き」に近い散文体で書かれている。「箇条書き」に近いというのは、重点のみ提示され、詳細な理論展開は行われていないからである。「境界」は、『人間詞話』の第一則早々に登場する。「一、詞は境界を以て最上と為す。」その後、王国維は境界とは何かを明瞭に定義せず、「造る境」と「写す境」、「有我の境」と「無我の境」といった「対概念」を上げて、一見二元論的に「境界」の説明を行う。特に「有我の境」と「無我の境」においては、それぞれの代表的な作品例を挙げて、詞話全体において、境界に関して最も詳細に説明されている部分である。

3　原文「“采菊東籬下，悠然見南山。”“寒波澹澹起，白鳥悠悠下。”無我之境也。有我之境，以我觀物，故物皆著我之色彩。無我之境，以物觀物，故不知何者爲我，何者爲物。」『王国維全集』第一巻、謝維揚、房鑫亮主編、広東教育出版社、浙江教育出版社、2009年、461頁。

4　「飲酒五」の訓読「廬(いほり)を結んで人境(ひとのよ)に在り、而も車馬の喧(かまびす)しき無し。君に問ふ何して能く爾るかと、心遠ざかり地自ら偏ればなり。菊を采る　東籬の下、悠然として南山を見る。山気日夕に佳く，飛鳥相與と還る。此の中に真意が有り、辨と欲して已に言を忘る。」「穎亭留別」の訓読「故人　分攜を重んじ、流れに臨みて歸駕を駐(とど)む。乾坤　清眺を展べ、萬景　相い借(よ)るが若し。北風　三日の雪、太素　元化を秉(つかさど)る。九山　鬱として崢嶸たり、瞭(まつたく)く陵跨を受けず。寒波　澹澹として起り、白鳥　悠悠として下る。歸るを懐う人は自ら急にして、物態　本(も)と閑暇たり。壺觴　飲嘯に負き、塵土　悲咤に足る。首を亭中の人に回(めぐ)らせば、平林　淡として　晝の如し。」

5　澹澹のもう一つの書き方は淡淡である。王国維は『人間詞話』における引用は「澹澹」となっているが、原作は「淡淡」となっている。（劉逸生主編、陳沚齋選注『中國歷代詩人選集 元好問詩選』（生活・讀書・新知三聯書店香港分店、1984年）、郝樹侯選注『元好問詩選』（人民文學出版社、1983年）、狄寶心注、『中國古典文學基本叢書 元好問詩編年校注』中華書局、2011年参考）

6　葉嘉瑩、『王國維及其文學批評』「第二編 王國維的文學批評 第三章《人間詞話》中批評之理論與實踐　二、興趣之義界－詩歌中興發感動之作用」、中華書局、1986年、230頁。羅鋼「七宝楼台，拆碎不成片断；王国维“有我之境”、“无我之境”说探源」、『中国现代文学研究丛刊』、2006年第２期。

7 原文「我與外物並非對立，外界之景物對我並無利害關係時之境界。」葉嘉瑩、前掲著作「第二編 王國維的文學批評 第三章《人間詞話》中批評之理論與實踐 一人間詞話之基本理論－境界說」、230頁。

8 陶潛著、龔斌校箋『陶淵明集校箋』、上海古籍出版社、1994年、503頁。

9 陶潛著、龔斌校箋、前掲著作、202頁。

10 原文「余閒居寡歡、兼比夜已長。偶有名酒、無夕不飲。顧影獨盡、忽焉復醉。既醉之後、輒題數句自娛。」訓読「余れ閒居して歡しみ寡く、兼うるに比ろ夜已に長し。偶たま名酒あれば、夕として飲まざる無し。影を顧みて独り尽くし、忽焉として復た醉う。既に醉し後には、輒に數句を題して自ずから娛しむ。」吉川幸次郎、小川環樹編集・校閲、一海知義注『中国詩人選集四　陶淵明』（岩波書店、1955年）参考にした。

11 これからの分析において、詩の原文と訓読の後、現代語訳を加える。訓読、現代語訳及び言葉の解釈は、龔斌校箋、前掲著作、吉川幸次郎、小川環樹編集・校閲、一海知義注『中国詩人選集四　陶淵明』（岩波書店、1955年）、斯波六郎『陶淵明詩譯註』（北九州中国書店、1951年）などを参考にした。

12 龔斌、一海知義、斯波六郎などの前掲著作。

13 管見の限り、この部分ないし「飲酒五」全体に現れている第三者の視点について論じられた先行研究が存在しない。

14 陶淵明の38歳の時、揚子江の上流江陵（湖北省）に陣を取った軍閥桓玄はクーデターを起こして東晉の首都建康を囲んだ。翌年、桓玄は帝位を奪い、廃帝は陶淵明の故郷潯陽に幽閉された。2年後陶淵明の40歳の時、職業軍人の劉裕が桓玄を倒し、その後東晉の政治を牛耳る。やがて、陶淵明の51歳のとき、劉裕は晉の帝位を簒奪し、自らの宋の国を建てた。

15 原文「淵明常在辛苦中，也常在飢寒中，他以「晨興理荒穢，帶月荷鋤歸」的勤勞，換來的生活卻是「夏日常抱饑，寒夜五被眠，造夕思雞鳴，及晨願鳥歸」」葉嘉瑩「「從豪華落盡見真淳」論陶淵明之「任真」與「故窮」」、『迦陵論詩叢稿』、中華書局、1984年、46頁。

16 原文「汉末以后，中国政治混乱，国家頽废，但思想则甚得自由解放。此思想之自由解放本基于人们逃避苦难之要求，故混乱頽废实与自由解放具因果之关系。」湯用彤『魏晋玄学論稿』、上海古籍出版社、196頁。

17 原文「故其时之思想中心不在社会而在个人，不在环境而在内心，不在形质而在精神。」湯用彤、前掲著作、196頁。

18 「飲酒五」の解釈において、龔斌も「心遠地自偏」における陶淵明の玄学思想の現れを指摘している。原文「心遠地偏之意乃屬魏晉玄學之範疇。魏晉隱逸之風極盛，玄學改變了隱居乃逃於江海之上以避世之舊觀念，指導人們不執著於外在行跡，而無追求心境之超然無累。倘內心超脫，則隱於市朝與隱於巖穴無異。」龔斌校箋、前掲著作、220頁参考。

19 『東坡題跋』巻二「淵明飲酒詩後」原文「「採菊東籬下，悠然見南山。」因採菊而見山，境与意會，此句最有妙處。近歲俗本皆作「望南山」，則此一篇神氣都索然矣。」

20 「見」は「物の形が眼に映って知られる。」〔說文〕見、視也、从目儿。大漢和辞典、巻十、316頁。「望」は「遠く見渡す。」〔釋名、釋姿容〕望、茫也、遠視茫茫也、又望、惘也、視遠惘惘也。大漢和辞典、巻五、1049頁。

21 臧克和「見と現の分化における実際の年代の問題（有关见与现分化的实际年代问题）」、『世界漢字学会第七回年会論文集』、11頁。

22 大漢和辞典、第４巻、1061頁。

23 原文「言、象为工具，只用以得意，而非意之本身，故不能以工具为目的，若滞于言象则反失本意。」湯用彤、前掲著作「言意之辨」、26頁。

24 「此は飛鳥うちつれて帰る境地を指す。」斯波六郎、前掲書、289頁。「是說歸鳥群讓人感受到真樸自然意趣，忘了再去辨析。」渌欽立校注『陶淵明集』、中華書局、1979年、90頁。

25 斯波六郎は「見るものをして、かく悠然たらしめたのは何か、と考えてみれば、それは南山そのものが醸し出される気分だといへよう。してみれば、「悠然として南山を見る」とは、即「悠然としてをる南山を見る」ことに外ならないともいへるのである。かうなると淵明が南山なのか、南山が淵明なのか、その区別がつかない。」と分析する。前掲著作、62頁。

26 大漢和辞典、1062頁。

27 詩の解釈は、劉逸生主編、陳沚齋選注『中國歷代詩人選集 元好問詩選』（生活・讀書・新知三聯書店香港分店、1984年）、郝樹侯選注『元好問詩選』（人民文學出版社、1983年）、狄寶心注、『中國古典文學基本叢書 元好問詩編年校注』中華書局、2011年参考。

28 「真淳」とは一つの形容詞として理解することより、真と淳という二つ中国哲学の概念として理解すべきである。真と淳の概念は、仁を中心とする儒学思想のものではなく、老子と荘子の思想から展開した玄学の概念だと考えられる。

29 原文「這七個字確實道出了淵明之化繁複為單純的一種獨到的境界。」葉嘉瑩「「從豪

華落盡見真淳」論陶淵明之「任真」與「故窮」」、『迦陵論詩叢稿』、中華書局、1984年、39頁。

30 李剣峰「豪華落尽見真淳：元好問与陶淵明」、『九江学院学報』第166期、2012年第３期、１頁～６頁参考。

31 「當久別嵩山自外地辭官歸來路經陽翟諸人餞別時作。」狄寶心注、前掲著作、341頁

32 詩の副題に李治、張肅、王元亮の三人の友人と「韻を分けて「畫」の字を得た」と書かれている。韻を分けるというのは、数人同時に詩を作る方法である。具体的にまず幾つかの韻を決め、それぞれ一人ずつ韻を分け、その韻に従って作詩をする。元好問は最初から「畫」の字という韻「a」が決められたため、押韻に従って偶数句の末字の多くは母音の「a」で終わっている。

33 原文「在天地之間放眼遠望，萬物都像跟人聯繫在了一起了。」劉逸生主編、陳沚齋選注、前掲著作、184頁。

34 原文「太素，自然之質。《乾坤凿度》:「太初者气之始也。太始者形之始也。太素者物之始也。」」郝树候『元好問詩選』、人民文学出版社出版、1959年４月。45頁。

35 吉川幸次郎、小川環樹編集・校閲、一海知義注、前掲著作、180頁～183頁。

36 河南省の西部にある轘轅、潁谷、告成、少室、大箕、大陘、大熊、大茂、具茨という九つの山である。劉逸生主編、陳沚齋選注、前掲著作、６頁。

37 劉逸生主編、陳沚齋選注、前掲著作、４頁。

38 〔潘岳、金古集作詩〕綠池汎淡淡、青柳何依依。大漢和辞典、第７巻、22頁。

39 〔詩、小雅、車攻〕蕭蕭馬鳴、悠悠旆旌。〔集傳〕蕭蕭悠悠、皆閒暇之貌。大漢和辞典、第２巻、724頁。

40 原文「想着歸家的人們。作者自指」劉逸生主編、陳沚齋選注、前掲著作、184頁。

41 原文「事物的本意」劉逸生主編、陳沚齋選注、前掲著作、184頁。

42 大漢和辞典、第２巻、724頁。

43 「閑暇」は「儀容態度が落付いてゆとりがある。おどろかないさま」という意味である。大漢和辞典、第２巻、724頁。

44 原文「道路上的塵土。亦以代指塵世的勞碌奔波的生活。」劉逸生主編、陳沚齋選注、前掲著作、184頁。

45 原文「我回過頭來看看亭中的人，一片平林閑澹如畫。亭中人：指留下來的送行人李治張肅王元亮等。」劉逸生主編、陳沚齋選注、前掲著作、184頁。

46 「澹」は淡に通じて、あっさりしているという意味である。大漢和辞典、第７巻、21頁。

47　淡は「あっさりする。」以外に「執着せぬ。名利に驅られぬ。」という意味もある。大漢和辞典、第７巻、21頁。

48　また、音声的に「飲酒五」の押韻は「an」それぞれはxuan喧、pian偏、shan山、huan還、yan言である。「穎亭留別」は「a」それぞれはjia駕、hua化、kua跨、xia下、xia暇、zha咤、hua畫である。いずれも明るい「a」音で発声される。

49「声符の攸は、人の背後に水をかけて滌い、身を清めることで、みそぎする意。そのみそぎを終えて、心の伸びやかとなった状態」白川静、『字通』、平凡社、836頁。